

佐保光俊 令和5年8月度特別作品

壬申の乱 佐保光俊

壬申の乱(六七二年)とは、天智天皇の皇子大友皇子と天智の実弟大海人皇子(のちの天武天皇。以下「天武」と記述する)とが、天智死後の皇位継承をめぐる戦った古代日本最大の内乱である。結果は天武側が勝ち、大友は自尽した。

天智による理不尽な処遇と身に迫る危険からやむなく天武が壬申の乱に及んだとする通説に對し、一石を投じる本(倉本一宏『壬申の乱』)を読んだ。それによると、天智は本意で天武に皇位を継がせようと思っていたのであり、わが子草壁皇子に皇位を継がせることを目論んだ。野皇女(のちの持統天皇)が主体的に壬申の乱を計画したとする。特に興味深かったのは、壬申の乱では、天武側がいち早く不破道(不破)を塞ぎ、大友の率いる近江朝廷側の東国への兵の徴発を封じ込めたこと。天武の動きに呼応して尾張国司が二万の兵を率いて天武に帰属したことが、乱の大きな勝因とされているのだが、実はこの兵は、白村江(六六三年)の敗戦の代償を求めて日本を訪れた唐の官吏郭務操の要請に依るために、尾張国司が対新羅戦に向けて兵を徴発し、近江朝廷に届けようとしていたものを天武側が接収したものだとする。ちなみに、日本書紀によると、天武はこの国司を褒めているのだが、その後国司は自殺し、天武は、なんて死んだのだらうかと言ったという。こうした相反する説のある壬申の乱の舞台となった地を歩いた時の句を中心に、既発表句・未発表句を合わせて特別作品「壬申の乱」として纏めた。

大海人一行は、小関越を通過して大津宮から吉野宮へ向かったであろうという

小関越三光鳥のよく鳴いて

一旦、吉野宮に退いた大海人は、機を見計らって拳兵する

磐石に立ちて吉野の滝を見る

大海人の湯沐邑(ゆのみら 領地)のあった美濃(向かう道筋の最大の難所加太越(かぶとこえ) 鈴鹿山脈南嶺南の断層帯に位置する峠

鶉の騒ぐ木を過ぎ加太越

鈴鹿山脈の東側を北上して美濃に到着した大海人は、現関ヶ原町野上に行宮(仮宮)を置いて指揮を執ったという

行宮へ踏み分けて行く夏の草

大友軍は、和斐(わぎみ)に布陣した大海人軍に金倉部邑(きんくら)で奇襲をかけたが撃退されたという。その地を流れる藤古川は、兵たちの血で染まったことであろう

いくつかは藤古川へと実梅落つ

大海人軍は北と南から大津宮への進攻を開始した。北側の近江路戦線的主力軍同士の激突の地は息長横河(現東京都市神代町)あたりであろうという。清らかな梓川の流れの傍には、地蔵が寄せ置かれていた

川涼し山また涼し地蔵はも

梓川澄んで戦を忘れぬや

南側の大和・河内戦線は、飛鳥京を制圧した大海人軍とこれを奪還しようとする大友軍が、乃樂山と衛我河(現石川)・大和川合流点あたりで会戦した

ここもまた戦ひの地か豆咲いて

天武は、壬申の乱の後、第二の天武の出現を防ぐために不破関を設けた。関の跡地に立つと、足下から藤古川を渡って近江へと続く不破道が伸びている

去りがたき夏風に立ち不破関

長等山前陵(伝弘文天皇陵) 天武の指示で編纂された日本書紀は大友皇子の天皇即位を認めておらず、大友は明治時代に定つてようやく弘文天皇と追認された

みささぎの道に懸かりて烏瓜

壬申の乱に勝利した大海人は、自らを神と称して皇位に就き、皇親政略を行った専制君主天武と次の持統の元で、律令体制が完成する

壬申の乱に向ふもの夏灯

伝弘文天皇陵から西に山を隔てたところに御廟野古墳(天智天皇山科陵)がある天智はあの世から壬申の乱をどのように見ていたであろうか

陵に大つごもりの雪の降る

和斐(わぎみ)は関ヶ原の古名である。壬申の乱から九百数十年後、再びこの地で天下を二分した関ヶ原の戦いが起きる

和斐とふ関ヶ原とふ夏野かな

《作品鑑賞》

村上正人

ことばによって時間と空間を飛び越えることができるのは、生き物の中で人間だけが与えられた叡知であると言ふ人もいるが、佐保光俊先生は作品の中でそれを我々に体験させてくださる。ご自身の足で実際にその地を訪れ、最新の歴史解釈を織り交ぜ、大きなスケールでドラマティックに表現された句に、我々の想像力は掻き立てられる。

鶉の騒ぐ木を過ぎ加太越

「鶉の騒ぐ」ではなく「鶉の騒ぐ」という表現が、峠を越え、やがて始まる皇位継承の激しい戦いを暗示しているようだ。

去りがたき夏風に立ち不破関

戦いには勝利したものの、後に再びその地位を狙う者が現れるかもしれぬという天武の安らかではない心持ちに思いを馳せつつ、不破の関の跡地に立つと、何やら去りがたい気持ちにさせる夏風が吹いていた。

みささぎの道に懸かりて烏瓜

佐保先生の記述にもある通り、明治三年になってようやく大友皇子は弘文天皇と追諡され、約七か月の短期ではあるが、第三十九代の在位と公になったようだ。道に懸かる烏瓜が、その陵の主と伝えられる御方の哀れを感じさせる。

陵に大つごもりの雪の降る

この句の「大つごもり」を大晦日と解釈すると、やがて新しい年が明ける(11時代の変革)とも思えたが、つごもる(11月が籠る)から、陵に眠る天智天皇のことを暗示しているのかもしれないと思えた。些末な解釈はさておき、陵に「雪の降る」その景を想像するだけで、心に沁みる。

和盤とふ関ヶ原とふ夏野かな

同じ原を壬申の乱の頃には「和盤」と呼び、関ヶ原の合戦の頃には「関ヶ原」と呼ぶという内容であるが、そこで繰り広げられた戦を思い起こすとき、『夏野』という季語がとても相応しく感じる。夏草が青々と息吹いている原に、かつては多くの兵が血を流し斃れていったという命のありさまを感じるからである。

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

壬申の乱。その時代の人と現代人とは異なると考えていたが、人の心は変わらないのだと感じた。我が子を天皇にしたいがために戦を仕組んだ母。他者にまた攻められることを恐れていた勝者。千三百年を経た、変わらぬ人の心のダイナミズムを感じながら、たっぷり読ませていただいた。

小関越三光鳥のよく鳴いて

「月、日、星、ホイホイホイ」と鳴く三光鳥。大海人皇子もこれを聞き、我こそは月であり日であり星である、と思いつながら吉野へ下ったのであろうか。

去りがたき夏風に立ち不破関

自らを神と称し国を支配した天武天皇が不破関を作らせた。勝者もまた誰かに破られることに怯えながら生きる。折から吹く夏風に離れたい思いが湧いてくる。

川涼し山また涼し地蔵はも

梓川澄んで戦を忘れめや

大海人皇子の両軍が激突した地。梓川は清らかで、ただ、地蔵が置かれている。この地蔵に多くの人が祈ったことだろう。今は戦などなかったかのように静かだ、だが、忘れることなどあるはずがない。

和盤とふ関ヶ原とふ夏野かな

壬申の乱と関ヶ原の合戦。その二つの大きな戦いの場であった地は、今ただ草の生い茂る夏野だ。芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」を思わずにはおれない。

《作品鑑賞》

亜矢

まず、作者の歴史に対する造詣が深く、且つ旺盛な探究心をお持ちであることに敬意を表します。実は、私は学校で習った歴史さえもあまり覚えておらず、これまで特別な関心を抱いてきませんでした。従って、「壬申の乱」にでてくる固有名詞や季語が、句の中でどう生かされているのか、俯瞰するような目で鑑賞することにしました。

小関越三光鳥のよく鳴いて

鬱蒼とした緑に三光鳥の澄んだ鳴き声。色合いと長い尾も相まって、小関越が効いていると思う。作者の姿も見えよう。

ここもまた戦ひの地か豆咲いて

豆は、古くはそら豆を指していた。日本へ渡来したのは七三六年とされるので、壬申の乱以降である。繰り返されてきた争いに思いをはせる作者。豆の花は、現代の平穩の象徴か。

和盤とふ関ヶ原とふ夏野かな

名称が変わっても、同じ夏野であることに変わりはない。現代にも通じる世の中の哀しみが根底にある。